



共同通信



2007年2月9日 126号(336号)

日本基督教団 西宮共同教会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町 10-22
0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email:koudou@gamma.ocn.ne.jp
<http://www.koudou.jp/> 振替 01170-3-4901
ホームページアドレスが新しくなりました。

時代にふり回されるのではない 自分の人生を語ってほしい、
あの時 心を躍らせて生きた 自分の人生を語ってほしい、
後悔に 身をふるわせたこともある 自分の人生を語ってほしい、
笑い 泣き 歯ぎしりをした 自分の人生を語ってほしい、
今日 こんな決意をしたという 自分の人生を語ってほしい

To tell the story 26
『涙もろくなって』

西宮から、のどかな瀬戸内海に面した福山の地に赴任してきたのは、1年前のことでした。バブルがはじけたことなど、どこかよその国の出来事かのように生きる人々の生活に驚き、なぜか「抵抗せねばならぬ」とばかりに勇んでいた自分が、今ではすっかり「福山っ子」になっています(車のナンバーももちろん「福山」。最近、近くに「倉敷」ナンバーができ、ちょっと気になったりしているのですが...)

ところで最近「私たち変わったよねっ!」って、二人で話し合うことがよくあります。そうです、互いが気づくほどに涙もろくなったのです。歳を重ねて、沢山の悲しみを知ったか

らなのでしょうか...(歳をとらなければ分からないことが確かにありますし、そのことがとっても大切なことであったりするのですが)。某国営放送の朝の連ドラを見て(Bは193放送。夜の連ドラ? 独り頷きながら涙を流し、日常に出会ったごく当たり前の出来事を話しあいながら、二人で涙をポロリ!)

悲しいのではありません、辛いのでもありません。ただただ自然に涙が流れてくるのです。人々を愛するなんて大それたことでもないのです。「でもみんな一緒なんだよね。みんないろんなことを飲み込みながら頑張っているんだよね。」そんな想いがわいてくるのです。だから、その繋が

りを壊そうとする人々、そのことが「進歩的(古臭い表現ですが、合う言葉が見つかりません)」なんて勘違いしている人に会おうと、心の琴線に触れられたようで『なぜ?』って叫びながらまた涙をポロリ、なんてこともあったりします。

人はとことん話し合えば「分かり合える」なんて幻想かもしれませんが。本当の裏切りを経験したことの無い幸せな奴の戯言だと言われるでしょう。また時には戦わなければならないこともあります。でも全ての人々が「闘う」というあり方を示さなければならぬ思いをするのも、どことなく窮屈さを感じます。人はそれぞれ人知れず、自ら望んでもいない重荷を負わされているのです。大切なのは、自分探しの幻想に取り付かれてしまうのではなく、何時も何時も自分のおかれた場所に留まる勇気を持ち続けること、これでよいのかこれでよいのかと何度も何度も、自問するこ

とのように思えてくるのです。

わたしは、人と対峙するほど強くありませんし、鋭い洞察力も持ち合わせていません。ただ「神はその独り子を賜ったほどに、この世を愛された」と信じたいのです。信じなさいと語るよりは、信じたいと告白し、生きる勇気をいただきたいのです。

福山に来て1年、そろそろここも卒業しなさいと告げられています。こんなに多くの人に赦されているのに、自らは共に歩むことのできない人々を日々増やしてしまっています。次の任地では「主よ私には愛が足りません」との祈りを持って歩み始めることができると願っております。

(鳥居 司)

日本基督教団西宮公会集會案内

早天祈祷会	毎月1日午前6時30分から	於：西宮公会集會室
教会学校	毎週日曜日午前9時から	於：西宮公会禮拜堂
聖日禮拜	毎週日曜日午前10時45分から	於：西宮公会禮拜堂
聖書研究祈祷会	毎月第1・3水曜日午後7時から	於：西宮北口西伝道所
讀書会	毎月第2・4水曜日午後7時から	於：西宮北口西伝道所
ゆっくり聖書を讀む会	毎月第3火曜日午前10時から	於：西宮公会集會室

「意識のなかで、自我と自我の対象たる共同体世界とのあいだにずれが生じるとき、そのずれは共同体世界を分裂させる否定的なものである。だから、ずれのあることを対立する両極の欠陥と見ることもできるが、じつは、両極を運動へと誘う原動力なのである」
(「精神現象学」ヘーゲル)

「・・・天国は、ある家の主人が自分のぶどう園に労働者を雇うために、夜が明けると同時に、出かけて行くようなものである。」(マタイによる福音書 20章 1節)の“天国”のことは、その先を読み進んで行ったとしても、すっきりそのことが解るように書かれることはありません。譬ば次のように言及されるだけです。「自分のものを自分がしたいようにするのは、当たり前ではないか。それともわたしが気前よくしているのか、ねたましく思うのか」(同前、15節)、「・・・このようにあとの者は先になり、先の者はあとになるであろう」(同前、16節)などのことがそれです。ここで言及されているところによれば、天国は自分のものを自分がしたいようにする“誰か”にゆだねられていて、そのことでの振舞いが、ある場合には“恣意的”に見えたとしても文句を言うすじあいのもではないこと、更にそのことをめぐって自分の正統性を主張しようものなら、全くの“後回し”にされかねないなどのことです。要するに、天国

はここで指示されているのは“自分”以外の誰も手も足も出せない世界のことであるらしいのです。

ところで“天国”なのですが、これはマタイ福音書での言い方です。マタイ福音書で天国が使われる別の例として、13章 24節以下の「・・・また、ほかの譬を彼らに示して言われた、『天国は、良い種を自分の畑にまいておいた人のようなものである』」などが挙げられます。これと類似する物語が譬ばマルコ福音書 4章 2節以下に書かれています。「・・・イエスは譬で多くの事を教えられたが、その教の中で彼らにこう言われた、『聞きなさい、種まきが種をまきに出て行った・・・』」とあって「あなたがたには神の国の奥義が授けられている」。これらのことから、マタイ福音書の“天国”とマルコ福音書の“神の国”は、ほぼ同じような意味で使われていることとなります。

そんなマタイ福音書の天国のことで「・・・それともわたしが気前よくしているのか、ねたましく思うのか」(20章 15節)などのことが言わ

れたりしています。直訳だと「・・・わたしがよいから、あなたの目は悪いのか」となるようなのですが、そうなる両者の言わんとするところは少なからず違ってきてしまいます。“・・・気前がよいから、ねたましく思うのか”と読んでしまう場合、一つの行為があって、そのことの結果ある状態を引き起こすということになります。それで“ねたま”という状態の“説明”にはなるのですが、直訳の場合の意味とはやはり違っていています。“わたしがよいから、あなたの目は悪いのか”の場合、一つの行為があってそのことの結果、ある状態を“引き起こす”ことになるのですから。“不可避的”に引き起こしてしまうというところが違いであるように読めます。自分でしようとしていることが、しているうちにどんどん外れて行ってしまうことが人にはあり得るということは、人というものの理解としては浅くはないのです。この譬の、夜が明けると同時に雇人に声をかけてもらって、たっぷり一日働いた人が、自分よりうんと後で働き始めた人が自分と同じ賃金をもらうのを目撃してしまって、せっかく一日せいっぱい働いた自分を貶めてしまうということはあり得ることです。たまたま貶めてしまったということではなく、

考えられなくてはならないのは、人を貶めてしまう何か別の力が働いてしまい、人にはそれが抗し難いらしいことです。

そうして起こってしまう人の振舞いが指摘されるだけでなく、手厳しく批判されます。そんなことをしていると“あとの者は先になり、先の者はあとになる”と。それもただ“前後”のことではなく、“最初”と“最後”の逆転が起こってしまうところが手厳しいのです。で、どうして厳しくなってしまうのだろうか。マタイ福音書が天国のこととしてこの譬をここで書いているのにはそれなりの理由があるはずで、確かに、人の振舞いの洞察ということでは深く鋭いのですが、その評価ということでも半端という訳には行かなくて、そのことの思いの強さが、“最初”と“最後”を逆転させずにはおかなかつた、ということなのかもしれません。

マタイ福音書の天国と、マルコ福音書などの神の国が類似しているとして、後者の場合のそれはそれなりに厳しいとしても、それ以外のものを徹底して追求しないでは置かない、ということにはなりません。言いたいの、**“実を結ぶ”** ことです。

(菅澤邦明)

ア コ ー ク ロ ー 通 信 (1 0 7)

年末から職場が、てんやわんやでバタバタしています。予定していたことができない状況です。

朝の、NHKの連ドラ「芋たこなんきん」見ていますか。1月の中旬、ちょうど1970年ごろの教会が出てきました。ベトナム戦争が泥沼化しているころ、日本中が騒然としていました。若者たちも真剣に、あるいはファッションで右往左往していました。大阪が舞台のドラマは、教会に若者たちが集まり「反戦フォーク」なんていうものを歌っているという場面です。教会としては様々な試みをしてきたと理解できるのですが、30数年たって今はすっかり保守化した教会がほとんどで、なんだかなあと感じてしまいます。

沖縄、癒しの島だ、のんびりしてる、とかの評価があるところですが、1月26日の地元の新聞には次のような報道があります。「2006年、少年補導37860人、人口比日本一」。少年事件が凶悪化しているとの話もあり、沖縄、何事か、という感じでしょう。実態は「深夜徘徊」や「喫煙・飲酒」ですから「大事件」ではないのです。しかし、子供たちの居場所、大げさにいえば「厭世観」みたいなものが伺いしれます。「沖縄の成人式」の話題は有名ですが、何となく悪

ぶってみたいというところなのですが、何をやっても達成感がない沖縄、大人たちも自分たちの利益優先で思惑ばかりが先行する、そんな大人たちへの反乱という側面もあると思います。

先ほどの話と重ね合わせれば、教会は、もっと子供の居場所として活用されていいはずですが、それとも、教会は、そんなややこしい子供たちの居場所として似つかわしくないのでしょうか。

ところで、1月26日、旧暦12月8日は、沖縄では「ムーチャー(もち=餅)の日」です。

本土の餅とは違って臼でつくのではなく、「餅粉」をねって、月桃(さんにん)の葉でくるんで蒸すのです。特にこの1年間男の子が(近頃ではもちろん女の子も)生まれた家では「初ムーチャー」として盛大に祝われます。「ムーチャー」には「魔」を打ち破る特別な力が宿っているといわれます。「ちからムーチャー」、「鬼ムーチャー」とも呼ばれています。で、この時期、どこのスーパーでも月桃の葉が売られています。むかしは、ちょっと草むらに入ればどこにでも見受けられたもので、金で買うものではないと言われていました。近頃は風味付けで黒

糖やかぼちゃなどいろいろな味が楽しめます。園の関係者でも何百も作るというしていました。もちろん、現在は、店で一年中売っていますので、一度お試してください。ムーチー以外でも、沖縄の蒸し饅頭などもこの葉で包むものがあります。いずれもサンニンの香りが特徴です。もともと、虫除けだったサンニンの葉は、今、「髪の毛」や「肌」にいいといわれ、エキスがこれも商品化されています。旧暦の12月なので、沖縄も曇れば寒いのです。使われる言葉に「ムーチービーサー」というのがあります。「ムーチーの日の寒いこと」というと

ころでしょう。今年は幸いなことに穏やかな日差しです。

この時期、沖縄に来るのは「賭け」でしょう。天気がよければ一番過ごしやすい沖縄です。逆に雨が降れば、コンクリートの建物内は、けっこう寒くなります。我が家でも、小さな電気ストーブのスイッチを入れる日があるのです。

みなさん、お風邪など召しませぬよう。

(沖縄・与那原・後藤 聡)

幼稚園に元気な声が帰ってきましたよ～！！

“がんばるぞー！！”ドン！ドン！ドーン！！という大きな太鼓の音と同時に公同幼稚園の3学期がスタートしました。園長先生と順子先生が向かい合って太鼓を叩きました。3学期を初めて迎えるぼっぼさん、教師達が太鼓を叩く手の動きに合わせて同じように手を動かしていました～その姿は本当にかわいくて…もちろん、さんぽさんやらったさんもかわいかったです はっばさん、ねっこさんは見るだけではなく、実際に太鼓を叩いたんです。叩く前に必ず「がんばるぞー！！」と叫んでから叩

くというのがお約束。さすが年長さんにもなると叩く姿が様になっていると言うかたくましくかっこよかったです。続いて園舎で集まり、“あけましておめでとうございます！ことしもよろしくおねがいします！”新年の挨拶を交わし、久しぶりに会えた喜びを味わった始園の日でした。3学期がスタートし、幼稚園には元気な声が帰ってきて、園庭にぎやかな声が響く毎日です！そして、冬の遊びを楽しんでいる子ども達です。こま、けんだま、おてだま、たけうま！まずはこま。男の子だけ～では

なく女の子だって負けていません！こまを回すのは何度か練習するとコツをつかんでできるようになります。こまにひもを巻くのが、これまた難しいのです。こまはしたい～でも、ひもが巻けない・・というのはやっぱりぼっぼさんのお友達。子どもの後ろから一緒にこまを持ち、ひもを巻き、いちーにのーさーん！と言って回します。一緒に回すからといって必ず回る訳ではありません。タイミングが大事！回す前にリハーサルを何度かやってから実践するといったように。回った瞬間は大喜び！！ぼっぼの頃は回せなかったのに、いつから回せるようになったの！？のと思う程うまくなっている、さんぼさんとらったさんたち。そして、年長さんにもなるとこま名人がいっぱい！友達同士でぶつけあって勝負したり、どっちが長く回るか勝負したり、手にのせるお友達もいるほど！続いてはけんだま。ジンジン～ジンギスカーン もしもしかめよ～かめさんよ～などの曲に合わせて、けんだまを巧みに動かす子ども達、さすがにぼっぼさんには難しいですが、年長さんにもなると見事にけんだまを操るのですから驚きです！おてだまも曲に合わせて手の甲から手の平へと交互に動かしたり あんたがたどこさ～と歌いながら楽しんだりと思い思いに遊んでいます。園庭ではたけうまにも挑戦している子ども達

です。こんな風にして、幼稚園には元気な声が溢れています。

1月27日(土)は武庫川河川敷にてたこあげ大会がありました。たくさんの方々にお越し頂き、武庫川の空が公同色に染まりました～！お父さんたちによる超巨大なたこも登場して、楽しい一時を過ごすことができました。お越し下さった方々、ありがとうございました。

2007年1月17日で、あの大地震から12年目を迎えました。幼稚園では全クラスで地震で亡くなった子どもを追悼するコンサートに参加したり、教会では犠牲者追悼礼拝も行われ、命について考える機会を与えられました。今を生きる子ども達、そして、今生かされていることに感謝しながら、これからも過ごしていきたいと思っています。

(水田有希)

私が出会ったいろいろな人たち

私が大学3年生の時に、教職免許取得に必要な単位として「地域にある福祉施設に実習に行く」というものがありました。養護学校や授産施設など、兵庫県にある福祉施設がずらりと書いてある紙が配布され、そこからどこに行きたいか希望を出したことを思い出します。

阪神養護学校と芦屋にある知的障害者の授産施設に、合わせて10日間行きました。その経験が教職免許取得になぜ必要であったのか、またどのような学びの為にその単位をとるのかという説明は全く受けず、また私自身何も考えずに参加しました。当時学校を辞めようかと思悩んでいた時期で、自分を見失う時もあり、気分転換という気持ちも多少ありました。その10日間は、偶然の出会いであったにも関わらず私にとっては一生に一度の大切な時間となりました。

その後、そのような福祉の世界に興味を持った私は、夏休みを使っていくつかの施設を訪れました。その一つで、思い出深く残っている場所が、長野県にある「共働学舎」です。同じ母校出身の大先輩であるおじいさん(宮嶋真一郎さん)が設立したその施設は、施設と言ってしまうのかわかりませんが、共に過ごしながら自給自足を行うという場所でした。長野県の奥にあるその場所で、知的に障害を持つ人や、社会でつまづきを覚えた人、また心を病む人な

どと一緒に農作業をして生活をしていました。とても質素な生活で、毎日15名くらいのメンバーが集まって自分たちで収穫した野菜やお米で作ったご飯を食べていました。また、住居は宮嶋先生が設計し、みんなで作った手作りの家でした。みんなは「母屋」と呼んでいました。そんな家が3つ位建っていました。夜は近くの温かい温泉に行ったり、共に生活をしながら働いていました。朝はとても早く起床し、朝から晩までその人それぞれのペースに合わせたスピードで働いていました。夜は疲れた体を癒すようにみんなで語り合ったりして過ごしました。たった3日間くらいの時間だったので本当にほんの少しその生活を垣間見るだけになってしまいましたが、鍵もかけずに、集まる人たちを管理するという事もなく、人間として一緒に過ごすということがあたりまえでそしてとても大切な空間としてそこに存在することに感動しました。宮嶋先生は視力がありません。ですが話しをしていてそのことに気が付かないほど、またこちらが緊張する程色んなものをしっかり見ている方でした。それ以来お会いするチャンスがなかなかないので、一生忘れることのない出会いでした。思い出すだけで、おいしいお菓子の入った箱を開けた時のように、思い出が香り一杯広がって、今でも胸がいっぱいになります。(田中知恵)

教会学校から

《1月の活動報告》

- 1月 日(日) 新年礼拝
- 1月 日(日) 新年カルタ大会
- 1月 14日(日) 午前10時45分～、
兵庫県南部大地震追悼礼拝(合同)
- 1月 21日(日) 大ぐにゃぐにゃ凧作り
- 1月 28日(日) 焼き芋と冬の遊び

《2月の活動予定》

- 2月 日(日) もちクイズ大会
- 2月 1日(日) 豆であそぼう!
- 2月 18日(日) ちょっといいこと
- 2月 25日(日) 未定。楽しい企画を考
えているので楽しみに!

たのしい学習塾

小学校1年生～4年生対象

(教会学校登録者に限る)

日時 ...毎週土曜日午後3～5時

場所 ...西宮公同教会1階集会室
(日によって異なります)

参加費...450円
(月/約4回、教材費含む)

小学校5年生以上

(教会学校登録者に限る)

日時 ...毎週土曜日午後7～9時

場所 ...西宮公同教会1階集会室

参加費...450円
(月/約4回、教材費含む)

大切な贈り物・津門川 54

“津門川の水”ってきれい？汚い？

第8回津門川塾

日時：2007年2月10日（土）午後10時～12時

場所：西宮公会堂集会室

報告：「身近な河川における化学物質問題」

川合真一郎、黒川優子、松岡須美子

（神戸女学院大学環境・バイオサイエンス学科生態毒性学研究室）

共催：甲風園1・2丁目自治会 / 甲風園3丁目自治会 / 南昭和町自治会

昭和園自治会 / 北口南自治会 / 西宮公会堂・西宮公会堂幼稚園

にしきた商店街・津門川の自然を守る会 / 門戸厄神商店街

神戸女学院大学人間科学部・環境生態系研究グループ

後援：西北活性化連絡協議会

連絡先：菅澤邦明（西宮公会堂・西宮公会堂幼稚園）

西宮市南昭和町 10 - 22 e | 0798 - 67 - 4691

山本義和（神戸女学院大学人間科学部）

西宮市岡田山 4 - 1 t e | 0798 - 51 - 8659

都市部の大小の河川の汚れは1960～1970年代と比べると現代は大幅に改善されていると言われます。

にしきたを流れる津門川も見た目とは別に汚れは大幅に改善されています。どの程度きれいなのか、どの程度汚れているのかなどのことを考えてみます。

津門川を彩る役者たちです。

2007年2月 あんなこと こんなこと...

- 2月 日(木) 午前6時30分～、早天祈祷会
- 2月 1日(日) 特別礼拝 森哲牧師説教(神和教会)
- 2月 1日(日) 礼拝後幹事会
幹事会后 神学生と幹事との昼食会を兼ねた懇談会
- 2月 2日(火) 午前1時～、ゆっくり聖書を読んでみませんか
- 2月 2日(日) 午後2時～教会若者の集い「ボーリング大会」

にしきた商店街...

- ・ 2月 4日(日) 午後1時30分～、津門川掃除
- ・ 2月 1日(土) 午前1時～1時2時、津門川塾、於：集会室
“津門川の水”ってきれい？汚い？
「身近な河川における化学物質問題」
川合真一郎、黒川優子、松岡須美子
(神戸女学院大学環境・バイオサイエンス学科)
- ・ 2月 2日(木) 午後6時～、芸文センター・ハムレット公演を記念して
「シェイクスピアとハムレットの世界」
金城盛紀(神戸女学院大学名誉教授)
交流会、ワレリー・ベチャコーヴィチ監督他
於：西宮公会堂礼拝堂、主催：西北活性化連絡協議会

アートギャラリー

- ・ 野菜市：2月6日(火)、2月2日(火) 午前1時より～
- ・ 2月1日(火)～1日(日) 小黒三郎組み木のおひなさま展
- ・ 2月2日(水)～2日(木) 陶芸サークル作品展

関西神学塾

- ・ 2月 2日(金) 桑原重夫先生「使徒行伝を読んでみよう」
- ・ 2月 9日(金) 岩井健作先生「岩井健作の宣教学」
- ・ 2月 16日(金) 勝村弘也先生「死海文書を読む」
- ・ 2月 23日(金) 田川建三先生「マルコ福音書註解(中)」

今月のあ・そ・び

“ たこ、ひこいちだこ、たこあげ ”

子どもの頃に手作りのたこで遊んだ記憶があります。骨組みになる竹も自分で割ったり削ったりした自家製でしたが、そのたこはくるくる回るばかりであがりませんでした。30年ばかり前のことですが、歯科医院の待合室でぱらぱらめくっていた製薬会社のパンフレットに、千葉県佐原(だったと思う)のたこで遊ぶ歯科医のことが紹介されていました。たこは発明したその人の名前をとって“ ひこいちだこ ”でした。その頃、“ ゲイラカイト ”が出現し、その劇的なあがり具合にたこの遊びが流行しはじめていました。たこはあがらなかつたら、ちっともおもしろくありません。ゲイラカイトは組み立ても簡単で、糸目も一つ糸も一本で、微風でもあがってしまうところがすぐれものでした。

製薬会社のパンフレットには“ 彦一さん ”がたこをあげている様子も写真入りで紹介されていました。九十九里浜であげているたこの糸の長さは確か3000メートルくらいだったはずです。図面入りのパンフレットをもらってきて実際にひこいちだこを作ってみたのもその頃です。ひこいちだこの特徴は全体が柔らかい構造になっているところです。骨

組みは約4ミリの太さの竹ひごをたこ糸で十文字に結んだりして作ります。細い竹ひごのことですから、どんなにしっかり結んでもぐらぐらしてしまいます。でも、それでいいのがひこいちだこです。変形六角形の骨組みの竹ひごの先端を割り込んで、たこ糸をはさみ込み、囲み込んでしまうとひこいちだこの本体の形になり、この六角形は、ぐらぐらだけれども形が全く崩れてしまうということはありません。貼り付ける紙には和紙(又は障子紙)を使います。本体より大きめに切った和紙を糊付けするのですが、その場合糊付けするのは本体を囲んでいるたこ糸だけです。骨組みになっている竹ひごには糊付けしません。貼り付ける和紙と骨組みは、六角形の角でたこ糸だけでつながっている、という具合なのです。こんなひこいちだこは、ぐらぐらしているが、どんな強い風でも柔らかくかわすことでバランスが保たれることになります。

たこがあがるかどうかはバランスです。子どもの頃の角たこもやっきたこも、いろいろしっぽで工夫してみるもののバランスを取るのですがあがりませんでした。ゲイラカイトは設計はもちろん素材が均質で、バ

ランスもほぼ完全です。更にそのランスを補うのが糸目糸を取り付ける三角の“幕”で、その先端部分に糸を結びつけて引くと、幕が飛行機の“垂直尾翼”の働きをしたこの左右へのブレを完全に防ぎます。

ゲイラカイトは一つの糸目の一本の糸で誰でも上げられる完全なたこなのです。

ひこいちだこの構造はゲイラカイトとよく似ています。全体がぐらぐらであるところ、垂直尾翼にあたる幕は、ひこいちだこは本物の垂直尾翼を備えています。竹ひごを丸めて作ったウチワ状の垂直尾翼を本体の一番下に取り付けます。これでひこいちだこの左右へのブレが防げますから、ひこいちだこも一つの糸目の一本の糸であがるたこになります。

毎年、一月末のたこあげ大会の前に、手作りのたこを一緒に作ります。今年ひこいちだこを作りました。しかも長さで1.5倍のひこいちだこです。長さが1.5倍、全長150センチの竹ひごは普通は入手できませんから、竹ひごもすべて手作りになりました。材料の竹は加西にある日本基督教団兵庫教区、関西農村センターまで、竹馬用の分とあわせて切りにいきました。切ってきた直径7~8センチ、長さ250センチの竹を四つ割りにします。それを更に二つ割り、更に二つ割りと繰り返して、1.5 くらいの巾に割ります。

更に、皮の部分の身の部分をそぐようにして割ったものを、合計40本くらい用意し、ナイフで巾7ミリ厚さ5ミリにまで削って仕上げます。竹の加工は、子どもの頃に田舎の村々を回ってくる竹職人が加工している様子を見ていて覚えました。竹を割ったり削ったりするナタやナイフの研ぎ方は、大工修行中の近所のお兄さんの様子を見ていて覚えました。手作りの大型のひこいちだこの材料の竹ひごは、そんな具合にして準備して、ぐらぐらではあるもののしっかりした“大ひこいちだこ”をそれぞれに完成させることができました。

そうして作ったたこをあげるにあたって必要なのは、十分な長さのたこ糸を用意することです。糸がのび切ったところでおしまいではなく、こんなのばしていいのか、と思うくらい長い糸でたこはあげたいものです。更に、“糸巻”も大切な道具です。たこはあがり始めると、風に引かれてどんどんあがります。でも、相手は風のことですから弱くなったり強くなったり、止まってしまうということもあり得ます。そんな時に、糸を引いたり戻したり巻き戻したり調節が必要で、特に巻き戻しの時には、大きくて丈夫な糸巻きが必需品です。たこをあげる時はともかく、おろす時に小さく巻いていたのではうんと時間がかかってしまいます。

たこは“たこあげ”というくらいですから、大空に高くあがって初めてこの遊びの醍醐味を味わえます。風に乗って大空を自由に空を舞うのは、ずっと人があこがれてきたことでした。それがかなわなくても、自分の手で作ったたこが大空で舞ってくれたら、そのことの何分の一かは達成した気分になれるはずです。たこあげは決して子どもの遊びではありません。よくあがる為に完全なバランスが求められるとすれば、大人の工夫と手助けが必要不可欠です。たこは大人もたっぷり遊んで、子どもたちも手伝ったり遊んだり、大人と子どもが大空に向かって一緒に遊ぶ遊びなのです。今年は、お父さんたちが“大たこ”に挑戦しました。横6メートル、縦3.5メートルの“大ぐにゃぐにゃだこ”です。幼稚園で子どもたちが持ち帰ったたこ・ぐにゃぐにゃだこは、簡単なデザインで確実にあ

がるたこです。そのままのデザインを大型にしたのがお父さんたちのぐにゃぐにゃだこでした。そんなに風は吹いていなかったのに、見事に風をうけてあがった大型のぐにゃぐにゃだこには作ったお父さんたちはもちろん、みんなで驚いたり喜んだりしました。

あの日に空に舞ったたこのことは、たこと空を見上げた子どもたちの心にきざまれていて、時には空を見上げるのもいいものだという事を思い出させるに違いありません。

(菅澤邦明)

まいの勝手に何でも案内

暖冬ではありますが、京都の寒さに耐えかねてテスト終わってすぐ実家に逃げ帰ってきましたマイです。前はカットを落とすという醜態を晒しまして本当に申し訳ありませんでした。2007年は時間を守る人間になりたいと思いますのでよろし

くお願いします。という文章を書いている今日は締め切り当日なのですが、今回は決してやっつけ仕事じゃないです。構想はずっと前から練ってあって、でもそういう思い入れのある文章書くときにはある程度の勢いが必要なので(余裕持ちすぎて書

くと、細かいところが気になって進まなくなっちゃうので)書くべき時期をうかがってたんです。自分で言うのも何ですが、ワタクシ追い詰められたときの方がいい文章書きます。でも追い詰められすぎるとやっつけ仕事になるんで、その辺の加減が難しいところですね。さあ今回はどうでしょう。

と、自分にプレッシャーかけたところで本題に入ります。今回紹介しますのは、初心に帰って児童文学(児童文学という言葉の定義は難しいんですが)です。今、日本の児童文学で一番おもしろいのは?と言われたら私は間違いなくこのシリーズをあげます。大体新しい児童文学はチェックしてますけど(読まず嫌いもありますが・・・)ここ数年でこれに勝るものはないです。上橋菜穂子作「守り人(もりびと)シリーズ」。すごいです。もう次作でシリーズ完結してしまうんですが、続き物でどんどんおもしろくなる物語ってあんまりないと思うんですよね。大体は1、2作目はおもしろくても、続いてく内にネタ切れになったりマンネリ化したりで、尻すぼみになるんです。でもこのシリーズは違います。捨て作がないです。個人的に、箱書き(あらかじめ最後をきちんと決めて書いてるもの)以外で捨て作がないのはこれまでゲド戦記ぐらいだったんですけど、ラストから二作目がおもしろかった

今、守り人シリーズも加わりました。このままいくらでも絶賛できるんですけど、とりあえずは物語を大まかに説明します。

出版社の言葉を借りるなら「人の世界と精霊の世界が混在するアジアンハイファンタジー」なんですが、ファンタジーだからと言って、世のブームよろしく少年少女が魔法使って妖精さんたちと青春ストーリー繰り広げちゃうぞってな話では全くないです。そんな話があるか知りませんが、まず、基本の主人公はバルサという三十代女性です。武人です。短槍使いです。心身共に半端なく強い御人です。守り人シリーズは、彼女が新ヨゴ皇国の第二皇子、チャグム(当時11歳)の命を助けることから始まります。舞台はどこか中世のアジアを思わせる世界。人々は<サグ>と呼ばれる普通の世界で暮らしています。が、呪術師などの人にはサグと重なった<ナユグ>という、精霊の世界が重なって見え、時にその二つの世界にまたがって事件が起きます。というか、ナユグはサグの自然に深く関わっているし、時の流れもゆっくりなので、ナユグで何か起こるとサグにも異変が生じるんですね。まあサグの一般の人はナユグの存在なんて知らずに生活してるわけです。サグには「新ヨゴ皇国」「カンバル王国」「ロタ王国」などの国がありまして、それぞれ違う人種や言葉や文化

を持っています。バルサは元々カンバルの出身ですが、新ヨゴを中心に用心棒稼業をしています。彼女の壮絶な生い立ちについては二作目「闇の守り人」で詳しく書かれます。で、そんな庶民階級のバルサが、ひょんなことから皇太子チャグムを守ることになり、話はナユグにまで発展して・・・というのが一作目「精霊の守り人」です。バルサの幼馴染の呪術師、タンダ(二十代後半男性)と、その師匠であり当代一の呪術師トロガイ(七十代女性)、皇帝に仕える星読博士見習いのシュガ(二十歳男性)なんかも巻き込んで、読んでて思わず顔をしかめるような臨場感あふれる戦闘場面、冗談抜きに読んでてお腹がすいてくる食事場面、などなど盛り込んだすごいお話になっております。登場人物に感情移入しにくそう・・・とか思った方も大丈夫。人物が皆個性的で魅力的で感情移入以前の問題です(ちなみに年上好きな私はジンさんとヒュウゴさんにメロメロです)。シリーズ物と言っても、基本的に一話完結なので読みやすいですよ。元々は三作目「夢の守り人」で終わりだったんですが、登場人物と世界設定の魅力が放っとけなかったらしく、成長したチャグムを主人公にした「虚空の旅人」が書かれました。それから「守り人」シリーズはバルサが主役、「旅人」シリーズはチャグムが主役、でしばらく二手に別れ

てたんですが、最終作「天と地の守り人」で二人の道が一つになりました。「天と地の守り人」はそれ自体が三部作で、まだ第二部までしか出てないのですが、来月の第三部発売が待ち遠しいやら終わるのが悲しいやら、複雑な心境です。

と、紹介をしたところで字数がいい感じなので、今回はこのへんで終わりにして次回、個人的な「守り人シリーズ」に対する思いを語りたくと思います。もう既に読者だという方は共に最終巻を愛でましょう。そうでない方は来月までに読んで！ネタバレしますよ！ではまた次回。御機嫌よう。(高橋 舞)



つとがわ
編集後記

田舎の父が、ケアハウスから老人保健施設(略して老健というらしい)に移ることになりました。その日、2月7日に娘が行ってくれることになって、その時の父の様子などを報告してくれました。まず、老健の場合“私物”はほとんど許されません。いろんな症状の高齢者の集団生活ですから、当然と言えば当然なのですが、父の場合少なからず抵抗したようです。たとえば、ほんのわずかのお金が入って、小さな小さな金庫と首に下げているカギのことでは、たとえば金庫のナンバーを最後まで教えなかったそうです。“私物”というものは、どんなささやかでも、その人がその人である印のようなものですから、自分であることの最後のトリデとして、抵抗したのかも知れません。逆に、老健のような施設は、見方によってはその最後のものさえ高齢者から取り上げてしまっ、自分であることを失わせる、生きる意欲をそいでいく場所なのかも知れません。(K)

大地震子ども追悼コンサート」が行われ、そこに集まった子どもたち、大人たちで歌を歌ってあの日をおぼえました。笑顔で歌う子どもたちを見ながら、みんなの未来が これからもずっと守られますように…。心からそう願いました。笑顔に向き合い、命に向き合ってこれからも生きていけたら、改めてそう思いました。(I)

先日、クローゼットの中を整理していたら、見覚えのある懐かしい文集が出てきました。それはちょうど中学二年生の時、あの震災があった年の文集でした。読み返していると、あの時の事が鮮明によみがえってきました。その年の卒業式はテントの中で行われ、卒業生である先輩の力強い言葉に励まされた事など…。色々な人に支えられてある今を感謝しながら、今という時を精一杯生きていかなければいけないな～と、強く感じさせられました。(Y)

あの大地震から12年。今年は今まで以上にこのことについて様々なことを感じました。そして、私の身近で信じられない出来事がありました。自分の周りでは起こらないと思っていたので衝撃的で大きな悲しみがありました。いつも子どもたちと一緒にすごしている毎日。こんな毎日が本当に幸せなことなのだと強く感じた1ヶ月でした。

(N)

1月に入り、12年前の地震を思い起こす機会がたくさん与えられました。12年前はまだ小学3年生。家は大阪なので被害もあまりなく、大地震が起きた実感がありませんでした。なので、あのときの地震について考え、そして命の尊さについて考えることができたことをありがたく思います。

毎日笑ったり、悩んだりしながら過ごせることに感謝の気持ちを忘れずに、一瞬一瞬を大切に生きていたいと思いました。

(Y2)

富山の義父(92歳)が、生活面である程度自立している施設(ケアハウス)から老人保健施設に転所した。食事はもとよりかなりの部分でこの1年の間に介助が必要になったからだ。夏に特別養護老人ホームが近くに新設されるらしく入るまでのつなぎである。生きていくことのすばらしさ以上に大変さもいっぱい目にしてきた2006年からの1年、今もまた新しい局面と出会い続けている。移動する日、娘が行ってくれた。何事にも機械的な伯父夫妻を見てきてしみじみ、「わたしおとうさんとおかあさんの子でよかった!」。懸命に生きてると、悲しいことの中にもキラリと光るものにも出会える。また両親に孫を自分の子どもを抱かせてやりたい、ではなく、自分の子どもがもし生まれるならその子どもにわたしたちと会わせたいと思ったと言っていた。(J)